資料３

2023.2.9

令和４-5年期 神奈川県青少年問題協議会
第4回 企画調整部会

コロナ禍の経験から構想するひきこもり支援

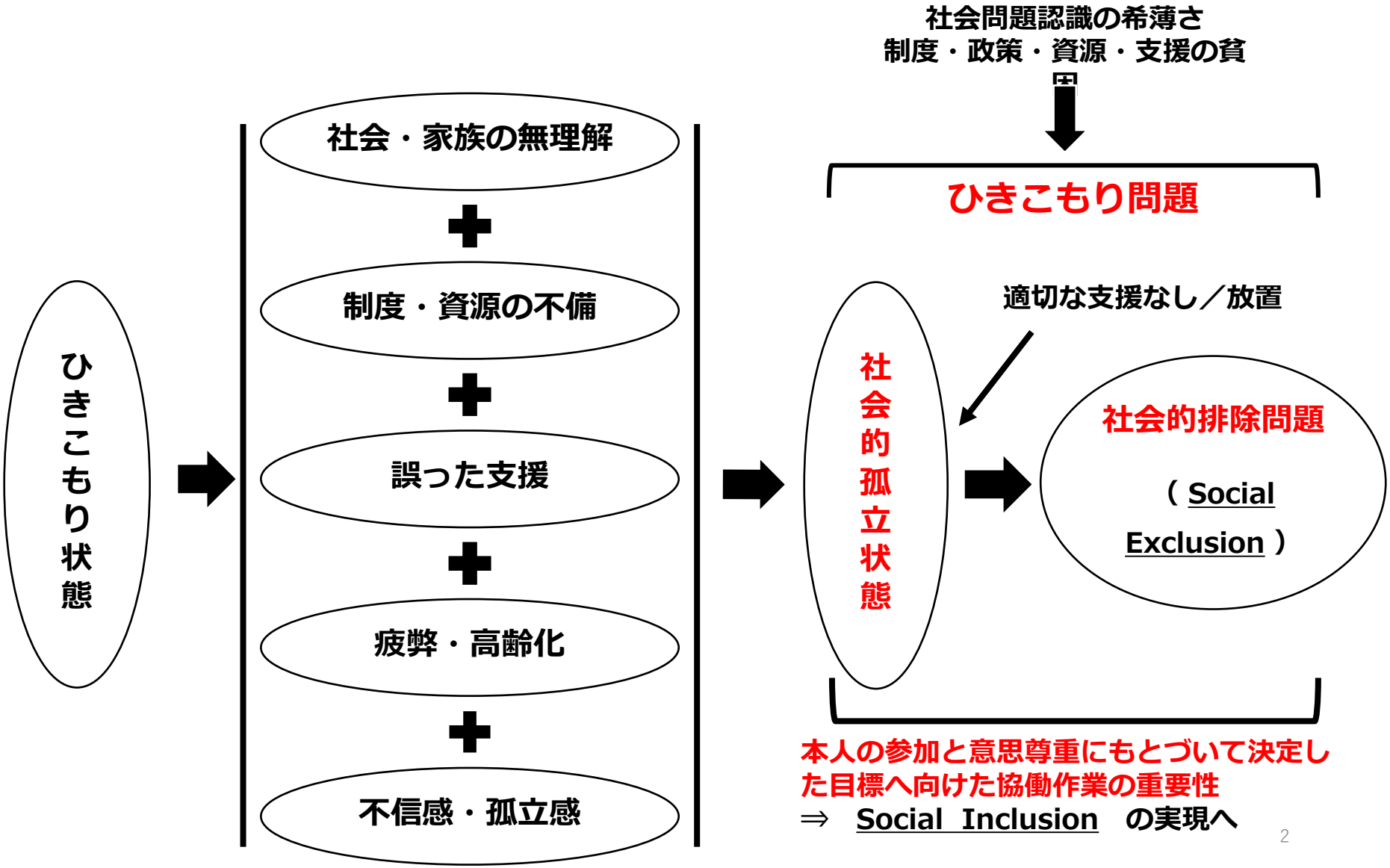
～自由性×多様性×利便性×合理性×効果性➡「最適化」支援方法の構築～

つながるcafé （横浜／弘明寺）

長谷川俊雄

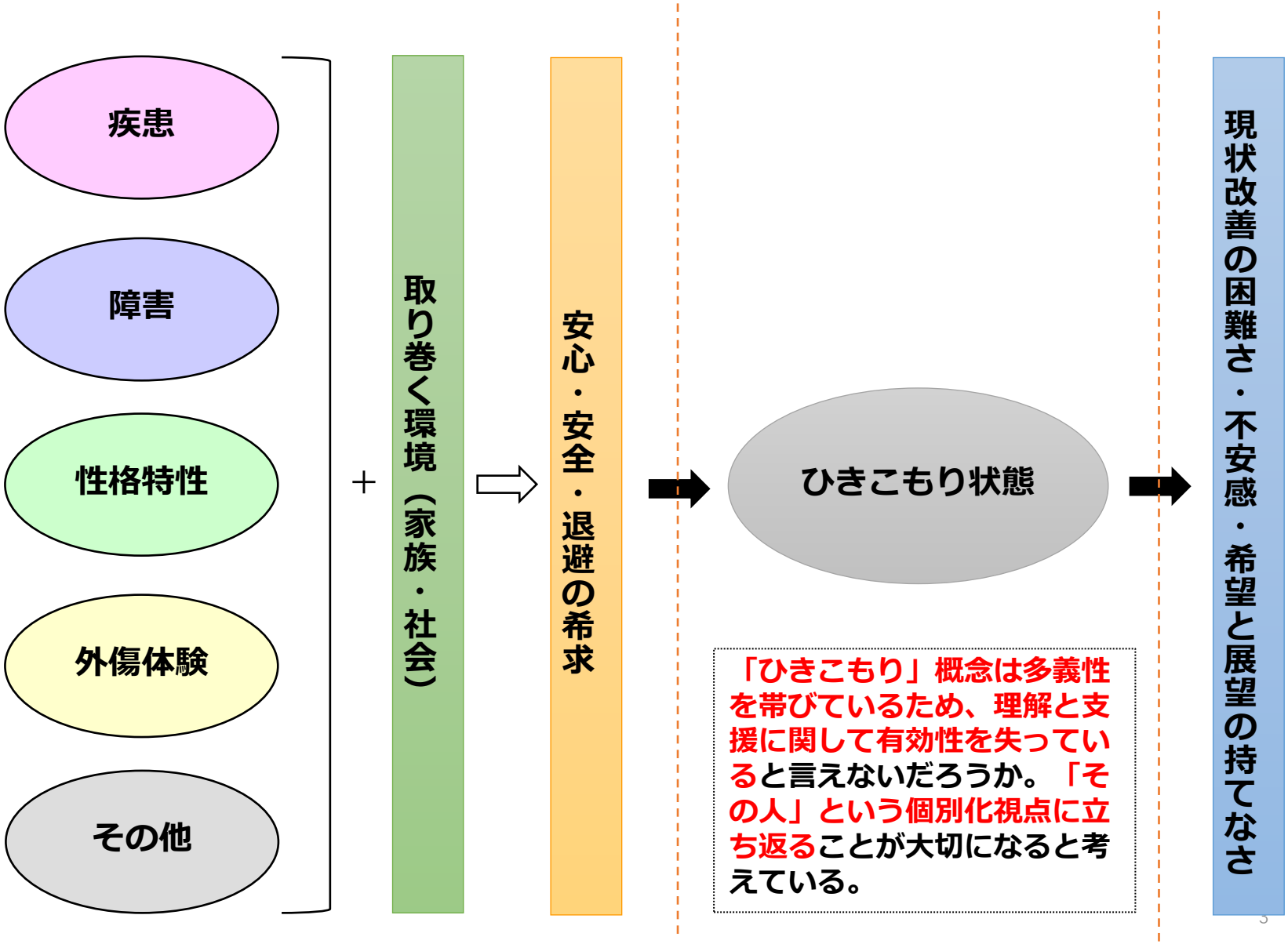
白梅学園大学子ども学部・教授
社会福祉士、精神保健福祉士
NPO法人つながる会　代表理事

ひきこもり「状態」からひきこもり「問題」への認識プロセス



「ひきこもり」状態における背景の多様性と現状の共通性への視点の大切さ

～ラベリングを超えて個別化して受けとめる・理解することから始める～

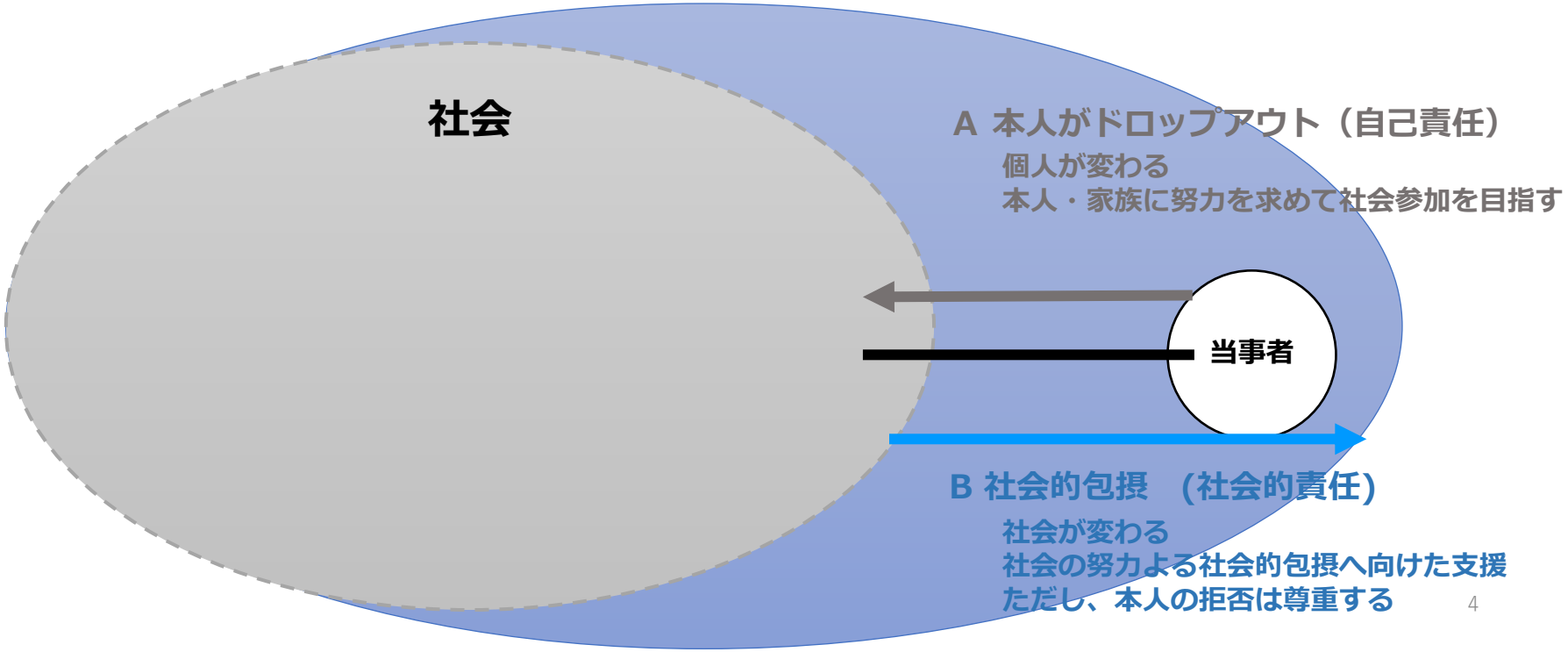


誰もが安心して暮らせる社会とは

～多様性を認め寛容性を持つ市民による共同性志向が不可欠～

4つのことから解放されることが求められている　⇒　そんな簡単ではない

① 自己責任論　⇒　社会問題と位置づけ社会的支援の必要性を認める
② 単一ゴール　⇒　多様なゴールを認めゴールの優劣をなくす
③ リハビリテーション・モデル　⇒　一方的に克服を求められない最適化モデル
④ べき・しなければならない　⇒　脱強迫的・非義務的な思考と行動を手にする



コロナ禍とひきこもり者　～対極的な状況が併存する時代～

A　緩やかな社会参加を経験していたひきこもり者

・利用施設の閉止や中断
・就労（訓練）の中断
・本人と親の心配と焦り

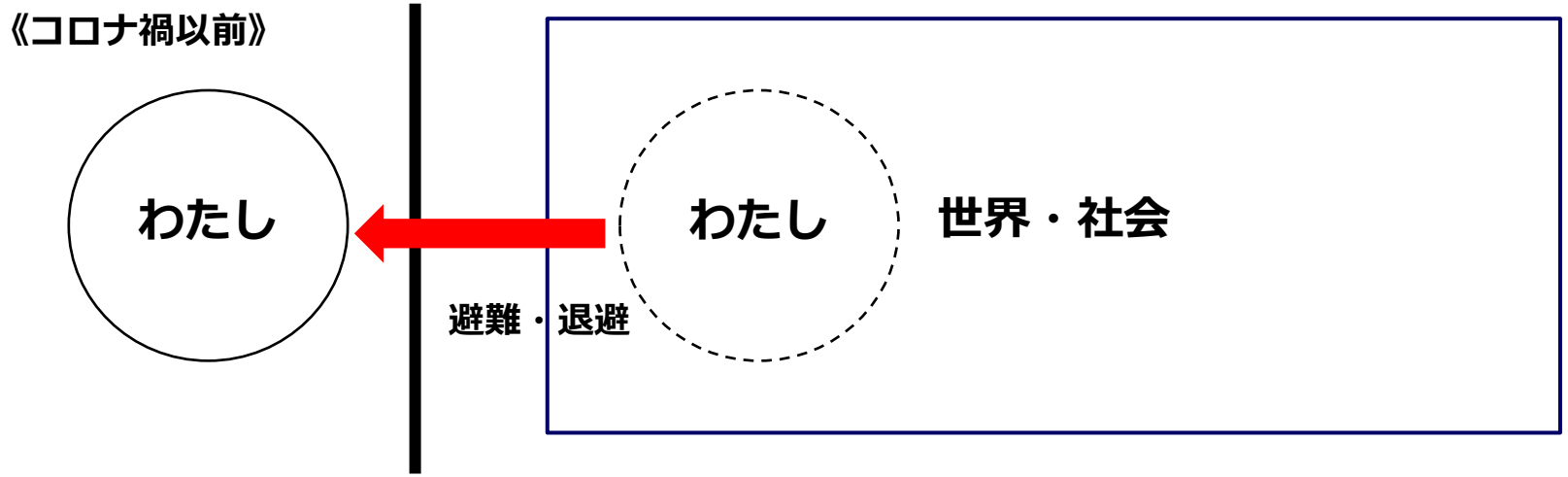
➡ 社会参加の制限と停滞
➡ 不安感・焦りの強まり
➡ 社会参加意欲の減退

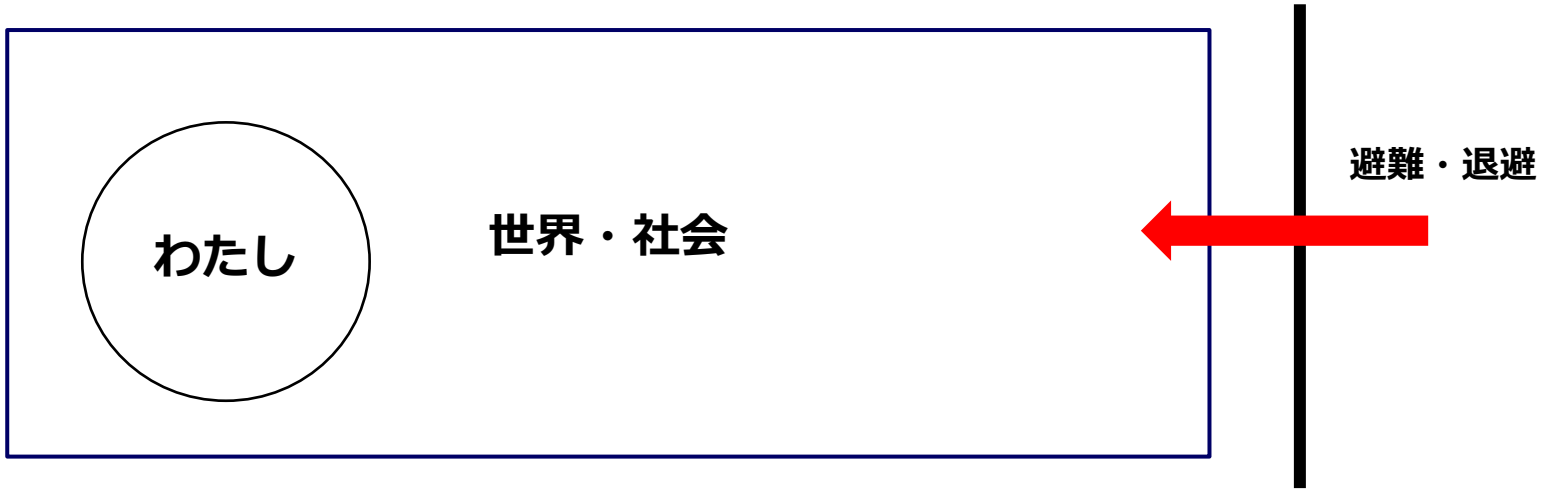
B　社会参加活動のない自宅で過ごすひきこもり者

・コロナ禍前と変化なし
・コロナ禍前より親の理解が促進
・コロナ禍前より親からのアプローチの厳しさ

➡ 困り感なし
➡ 親の理解の促進　（類似経験による理解の促進）
➡ 家族間の葛藤や緊張の強まり　（環境要因によるストレスの影響）

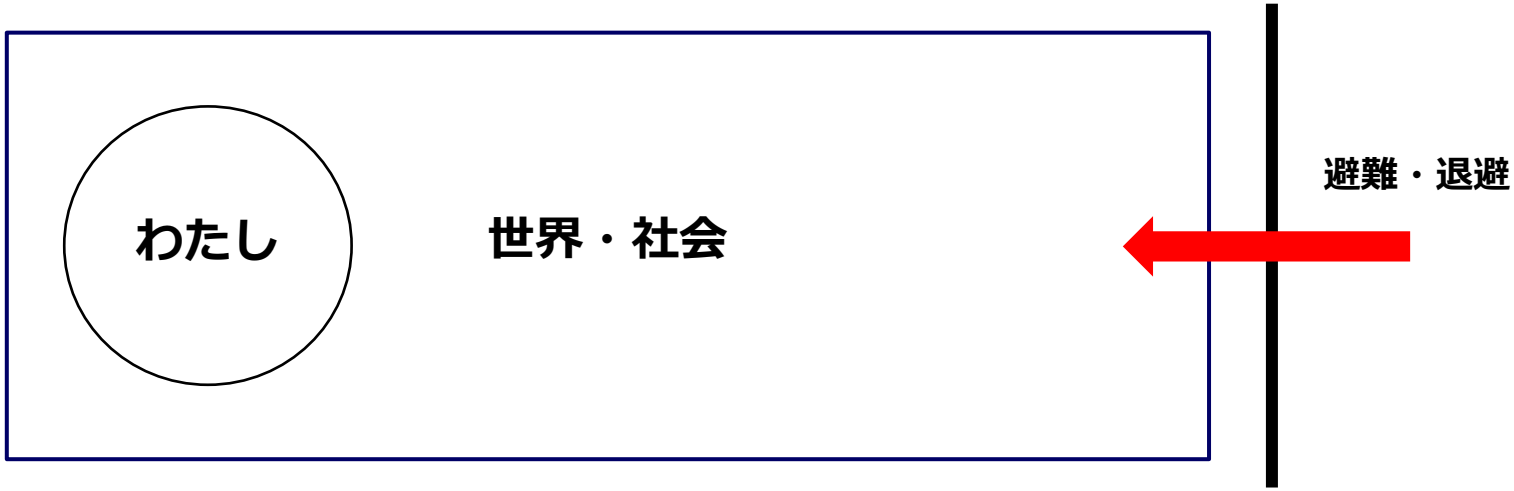
コロナ禍におけるひきこもり　①
～世界と社会が「わたし」を包摂して「問題」を希薄化する～



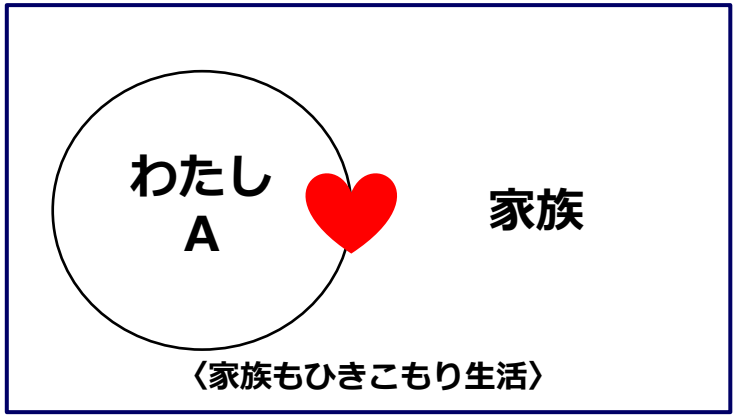


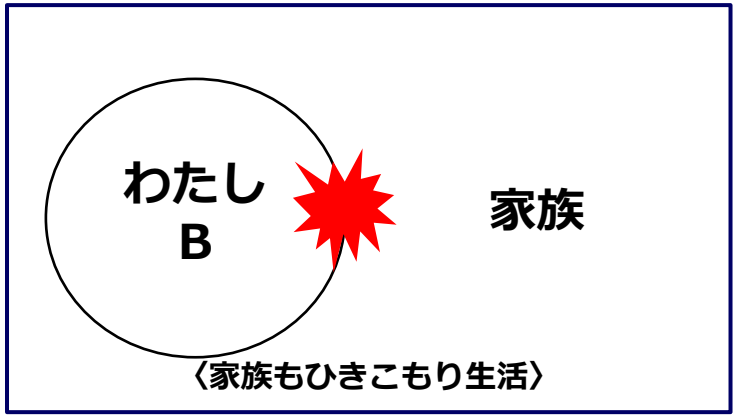
《コロナ禍の自粛生活》⇒差異・異端・少数派の一時的緩和とひきこもり体験の共有、世界・社会の喪失

コロナ禍とひきこもり②
～家族の理解の深まり／家族との緊張・葛藤の強まり～



《コロナ禍の自粛生活》⇒差異・異端・少数派の一時的緩和とひきこもり疑似体験の共有、世界・社会の喪失

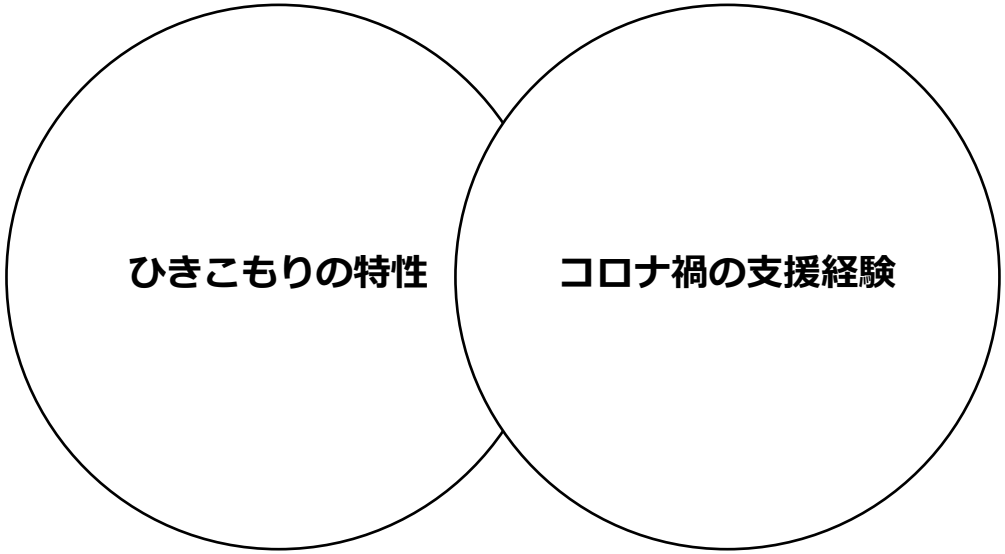




家族の**理解**の深まり ⟷ 家族の**緊張・葛藤**の強まり

<u>この差はどうして生まれるのか</u>

コロナ禍の経験から構想するこれからのひきこもり支援



自由性×多様性×利便性×合理性×効果性 ➡「最適化」支援方法の構築

「対面」と「オンライン」の複線的支援の実施についての検討

- **支援の目標とはそもそも何になるのか**
- **支援内容による支援方法の検討**
- **重複提供の可能性の検討**
- **実現可能性の程度**